ヘレニズム期の戦時における女の参加

櫻 井 悠 美

はじめに

古代ギリシアにおいては、一般に女と戦争は関係のないものとみなされてきた。戦争は男の仕事、男の領分であったのである。(1) しかし実際の場面では、トゥキュディデスが記述しているように、女も防戦に加わったという正反対の状況もあった。(2)

これまで女と戦争について論じたものについて列挙するならば、David Schaps はそれぞれのポリスに属する女たちが自分の住むポリスへの帰属意識をもち、侵入した敵に物を投げつけて防戦したと述べている。(3)

F.Graf も女は自己防衛の場合、投石などによって防衛したと解釈しているのである。普段は祈り息子や夫や父親を戦争に送り出している女も、緊急時には黙っていた訳ではなく、防戦にうって出たと主張する。(4)

William D.Barry は、女たちが投げた武器としての屋根がわらに注目し、その有効性と手に入れやすさから、多くの時代にわたって屋根がわらを投げる行為が見られることを指摘している。とりわけ武器を持たない女にとって、屋根がわらは有効なものであったと述べている。(5)

Pasi Loman は、D.M. Schaps や F.Graf そして W.D.Barry について、戦時における女の個人的局面を論じているとした上で、さらに戦争は男の仕事だが女を必要とし、女のいない戦争はなかったとまで断言しているのである。(6)

兵士として武装し戦場に赴いた女は、確かに前古典期や古典期にはいなかったが、戦争への参加ということで論ずるならば、女も防衛戦には加わったと考えるのが妥当であろう。拙著『古代ギリシアにおける女と戦争』でもふれておいたが、敵への防戦に自分の家で女たちは参加したと筆者も考えている。(7) 男は戦争、女は家庭という領域は、必ずしも該当しない場合もあったのである。

本稿ではこうした視点から女がどのように戦争と関わったのかを、アレクサ

ンドロスの遠征を中心に検討していきたいと考える。

１、女の分類

まず初めに女について一言ふれておきたい。古代ギリシアでは女を大別すれば三種類に分けられる。まず市民の母や妻や娘といった市民身分の女たちである。桜井万里子氏の表現によれば、「産める女」にはいるものたちである。(8) 現実には「市民の子供を産むよう強制された女」と言った方が妥当であろう。生命の維持存続のため当時の市民たちが、自分たちの都合の良いように女たちを機能別にわけたのである。

前４世紀に生きた弁論作者であり政治家のヒュッペレイデスの断片204には、「家の外を出歩く女は、道行く人が誰の妻かと尋ねるのではなく、誰の母かと尋ねる年齢であるべきだ」とあるのは、生殖年令にある市民身分の女が出歩けば他の男に犯される危険があり、自分の家の後継者である子供の誕生のさまたげになると考えたからである。

デモステネスも第 59 弁論「ネアイラ弾劾」の中で、「人がヘタイラをもつのは快楽のため、妾をもつのは身のまわりの世話のため、妻をもつのは嫡子をもうけるため、そして家の中の管理を任せるため」と明言していることからも明らかであろう。(9)

つぼの絵の中でも髪が短く描写され、男たちの性の相手として扱われていた女こそ、ヘタイラである。シュンポシオンの席でよく見られた、女とみなされない女たちであった。(10) 彼女たちは勿論奴隷身分の女であり、主人の命令であれば戦場にも赴いた。(11) これらのもの達の他に、家の中にも奴隷たちがいた。クセノフォン『オイコノミコス』の中にでてくる妻は、女奴隷を管理する義務があったのである。(12) 病気になれば世話をし、よく働くものにはそれに答えるよう対応し、怠け者には厳しく接するように描かれている。

このように市民身分の女と奴隷身分の女がいたが、その中間的存在としてアテナイには在留外人（メトイコイ）の女たちがいた。基本的にはアテナイの場合男であれば 12 ドラクマ、女の場合は 6 ドラクマを人頭税として国家に支払わねばならないものたちである。一定期間居住する外国人のことで、解放され自由身分のものとなった解放奴隷も、メトイコイ身分に分類された。なかには人頭税が免除された特権をもつメトイコイもいたが、全体からみればほんの少

数であった。男のメトイコイは市民と共に戦争になった時は戦うよう要請されたが、(13) 参政権は無いものたちである。

以上の三種類の女たちが全てのポリスにいた訳ではないが、自由身分である市民身分の女と、奴隷身分の女は殆んどどのポリスにもいたといってよいであろう。

2、女性の本性観の傾向

当時の男たちが書き記した史料を検討する前に、当然ながら彼らの考えが反映されている女性観を把握せずして、その記述の真意を理解することは難しい。そこで大まかな女性観の傾向を考察しておきたいと思う。

まず初めに前古典期（前 8～6）を代表するヘシオドスの女性観は、S.B.Pomeroy が指摘するように、『神統記』と『仕事と日』の中で「女性嫌悪」が表明されている。(14) 既に彼の女性嫌悪が当時の時代の産物であったことを西村賀子氏が指摘している。(15) 従来の女性の仕事に加えて農業労働への要求が、人口急増のために求められていた。家族形態も核家族化していく中で、男女を問わず労働力の増加を求めていた社会が背景にあった。

こうした社会事情を反映してヘシオドスは、女を美しき禍悪（カロン・カコン）として位置づけたのである。(16) しかしどんなに女を禍とみなそうとも、女なしでは子孫がたえる。そこで女は禍いだが、生殖機能だけは必要であり、従ってヘシオドスも女を必要悪として認めざるをえなかった。何より求められていたのは立派な妻、貞節な妻である。それは男にとって家のために子孫を産み育て、神を敬い、友人たち（とりわけ近隣のものは困ったとき助け合えるため）を大切にする夫を支え、少食で節約に励む妻である。(17)

吉田敦彦氏はヘシオドスの女の性質を、男にとってひどい災いとなる「恥知らずな犬の心」「盗人の性」だと指摘する。(18)

前 7 世紀の詩人であり哲学者のセモニデスも女の創造について断片を残しているが、その中に「女性嫌悪」の考えは引き継がれている。例えば邪悪な狐から女は造られたとか、叩かれてばかりいるろばとか、最悪な猿から造られたと述べているからである。(19)

前 6 世紀から 5 世紀にかけて活躍した三大悲劇作家の一人のアイスキュロスの作品に『テーバイ攻めの七将』がある。前 467 年に上演されたこの劇中のせ

りふに、「恐怖に取り憑かれると、家にも国にも一層大きな禍となるからだ」（池田黎太郎訳）と女を描いている。(20)

ソフォクレスも、「今といわずこの後といわず、女に勝る禍いは無いであろう」（木曽明子訳）と述べており、(21) エウリピデスも、「女はあらゆるもののなかで最も手に負えない禍いである」（根本英世訳）とし、「女性嫌悪」の思想はしっかり継承されているのである。(22)

トゥキュディデスは女性の本性について、「女性の本性（fuvsiß）に反して勇敢に戦った」と記述していることから、女性の本性を臆病で弱いものと考えていることがわかる。(23) クセノフォンも『オイコノミコス』の中で男には屋外、女には屋内の労働と任務に適するように性質を付与し、神が女には男より非力な身体を与え、夫に対しては妻に対してよりも、より多くの勇敢さを与えたと記述している。(24)

プラトンも『国家』の中で次のように述べている。

> 「したがって女は女、男は男で、どちらもそれぞれの自然な性質に応じてどのような仕事にもあずかれるわけであり、ただすべてにつけて女は男よりも弱いというだけなのだ。」（藤沢令夫訳）(25)

ヒポクラテスも彼の名で伝えられている、「処女の病について」の中で、女性の本性は「より小心でより軟弱」と記している。(26)

このように古典期に入ると、女を禍いとしつつもペルシア戦争やペロポネソス戦争の影響から、女性の本性を臆病で弱いものというイメージが、前面に押し出されてくるのである。直接戦争には役に立たない女は、男からみれば臆病で弱くて小心者といった考えをもつようになったと推測される。しかし戦争という非常事態ではトゥキュディデスが記述するように、男の考える女の本性に反する行動を、女たちはおこしたのである。男たちの女性の本性観は平和時のもので、戦時では現実とのギャップをトゥキュディデスも実感したと思われる。

臆病で小心者でありながら、同時に大胆さをあわせもつのが女であると、エウリピデスは指摘する。「私たちは女。恐怖に打ち負かされもするが、しかし私たちの大胆さをしのぐ者はいないだろう」（西村賀子訳）と伝えている。(27)

そうした大胆さが、トゥキュディデスの記す「本性に反して」という内容と

合致するのではないだろうか。ヘレニズム期にもわたり活躍したアリストテレスは、『動物誌』の中で思春期の少女について言及し、非常に好色な少女は、ますます放縦になるので監督が必要だと述べている。(28)

『政治学』でも女たちに関する放任は、国制の意向からみても国の幸福からみても有害であるとし、支配監督すべきは男で、支配される女の放縦は、有害と考えているのである。(29)

女性の本性を男が語る時、社会状況の変化に応じて彼らの認識も変化していった。前古典期では女は禍いととらえる考え方が主流で、古典期にも引き継がれていたが、戦時下に入ると禍いととらえるよりも小心で弱きものという側面が強調され、さらに時代が下がると弱きものから、女の放縦こそが批判されていく。このように女性の本性とは、あくまで男性側からみた歴史的所産なのである。勿論女性一般ではなく、市民身分の女について語られた本性であることはいうまでもない。

こうした男性側からの女性の本性観の傾向を理解した上で、ヘレニズム期のアレクサンドロスの遠征を中心に、戦争と女たちの関わりを検討することにしたい。

3、アレクサンドロスの遠征と女たち

カイロネイアの戦いでフィリッポス II 世はギリシア諸ポリスを相手に勝利をおさめた。(30) その後フィリッポスはコリントスにギリシア諸ポリスの代表を招集し、いわゆるコリントス同盟が成立し、ギリシア諸ポリスを配下においたのである。

しかしテーベは前 335 年フィリッポス II 世亡き後、彼の息子のアレクサンドロスと再度戦って敗れ、3 万人が捕虜として売却された。(31) アッリアノスも神殿をのぞきテーベを徹底的に破壊し、神殿にいながらテーベの女や子どもも殺害されたことを記述している。(32) また女子供も例外を除いて、全員を奴隷にしたと言っているように、(33) ヘレニズム期においても戦いに敗れれば奴隷として扱われ、売却されたのである。古代ギリシアではいかなる戦争であろうとも、敗れれば殺害もしくは自由身分から奴隷身分への転落となり、わずかな場合のみ例外的に身の代と交換で返されることもあった。グラニコスの戦いでは２万人の捕虜がマケドニアに送られたという。(34)

ギリシアを征服したアレクサンドロスは、ギリシア・マケドニア軍を指揮して、宿敵ペルシアと戦うべく遠征を決意した。その際アレクサンドロスはマケドニアの兵士達の中で、新婚の兵士らには特別一時帰郷させ妻と一緒にすごさせるよう計い、(35) それは兵士たちに何より喜ばれたとアッリアノスは伝えている。(36)

それでは以後にみられるアレクサンドロスの遠征と女たちについて考察するが、まずペルシア側の女たちから見ていきたい。

（1）ペルシアの女たち

ヘロドトスはペルシア戦争の時でも大勢の妾を伴って、クセルクセスはギリシアへやって来たと記述している。(37) 前 333 年のイッソスの合戦では、ダレイオス III 世は母や妃、そして子供達をも同行していたが、それは祖国の慣習に従ったものだと、クルティウス・ルフスは伝えている。(38) 彼によれば捕虜となったダレイオスの母や妃たちに対して、アレクサンドロスは敬意を払ったと伝えているが、ダレイオスの母にしてみれば、今はアレクサンドロスの婢女であると我身を嘆いて語ったという。(39)

捕虜として捕われの身であることには変わりはなく、いくら大切に扱われようとも、もはや王の母、王の妃という立場にはなく、王の母シシガンビスにしてもその自覚があったということであろう。

ダレイオスは逃亡してもなお女たちをそばにおいたが、(40) さすがに母や妃や子供達を釈放してくれるよう、アレクサンドロスに使節を送り出している。(41) しかしアレクサンドロスはダレイオスが嘆願者として来るなら身代金なしで母や妻子を解放しようと言ったが、(42) 解放を待たずにダレイオスの妃は亡くなったのである。(43) ダレイオスは王妃が侮辱を受けることを拒んだために殺害されたと邪推したようだが、実際は王妃の操は守られたと伝えられ、(44) プルタルコスは王妃の死を出産が原因だと述べている。(45)

ダレイオスの母や妻たちは捕らわれた直後、ダレイオスが死んだものと思いアレクサンドロスの朋友の一人レオンナトスの足にすがって、父祖の慣習に従ってダレイオスの遺体を葬ることの許可を嘆願している。(46) ペルシアにおいても最後の勤めとしての埋葬は、女たちの仕事であったと記述されているが、足にすがって嘆願したり、埋葬が女の仕事であったりするのは、ギリシアと同様

の内容である。

同行したのは王の家族だけでなく、王子たちを教育する女官や、王の妾たち多数もいたのであった。また王の近親者や友人の妻も一緒で、色とりどりの衣装や飾りで身をまとったという。(47) アレクサンドロスとの戦いのためペルシアの女たちも王族から奴隷まで大移動を余儀なくされたのである。

（2）アレクサンドロスの軍中の女たち

アレクサンドロスの軍中にも、女や子供たちは大勢いた。アッリアノスの記述には以下のように伝えている。

> 「ところが夜中の第二刻ごろ、雨が降ったことさえ軍中では、それに気づく者もなかったのに、その川が雨のため突然増水してふくれ上がり、鉄砲水となって押し寄せた結果、軍に同行していた女子供大多数の命がうばわれ、王専用の行季全部に加えて、せっかく生き残った役蓄までもが押し流されてしまったのである。」（大牟田章訳）(48)

これは前 325 年陸行軍がガドロシア・マクラン砂漠の踏破の折にあった悲劇である。敵方の手にかかって死ぬ時もあれば、このような天災によって命を落とす場合もあり、遠征軍に同行すること自体、危険をはらんでいるものであった。前古典期、古典期と大きく違う点は、同行している女たちが奴隷身分のものだけではなく、自由身分の女たちも含まれていることである。

その理由として、アレクサンドロスは遠征軍の兵士にアジアの女を妻として与え、その妻から子供が生まれたからである。祖国に妻子がいる場合もあったが、アジア人の妻との間に生まれた子供を故郷へ連れ帰ると諍いの種になるとして、アレクサンドロスがその子供をマケドニア風に育てあげ、成人したあかつきには父親であるマケドニア兵士に引き渡す約束をしたという。(49) 東方のアジア人の妻から生まれた混血の子の誕生は、文字通り東西融合の結晶であるが、遠征軍の兵士がいる限り、おびただしい戦死者とともに、同時に生まれてくる新しい生命もあったのである。

アジア人女性の側からみれば、アレクサンドロスの同化政策の手段として使われていたのである。王自身既にバクトリア人オクシュアルテスの娘ロクサネ

と出会い恋に落ち結婚したが、(50) 前 324 年スサでもまた集団結婚式を挙行し、文字通りアジアの王としての正統性を証明しようとしたのであった。(51) 東方の諸民族の王として君臨するため、ペルシア流のしきたりを取り入れ、ダレイオスの長女バルシネと、オコスの娘パリュサティスを娶ったのである。

一夫一婦制ではないマケドニア王族では、何人の妻と結婚しようが男の側からすれば何ら問題はない。しかし現実には女同士の嫉妬や権力争いは凄まじく、アレクサンドロスの母オリュンピアスは、キュンナ（アレクサンドロスの異母妹）の娘エウリュデイケに自殺を迫り、彼女はやむをえず自ら命をたったのである。(52) アイリアノスも送り届けられた毒人参と紐と剣をあげている。(53)

こうした凄惨な事態は逆に、人間本来のもつ感情を表現しているものともいえよう。対等な男女関係ではなかったことを、忘れてはならないのである。プルタルコス「アレクサンドロス伝」には、ギリシアから 3 千人の芸人がアレクサンドロスのもとに到着したと記述されている。(54) 女たちのバッコス踊りをみて兵士たちは慰められ志気を高めたであろうが、連れて来られた女たちは強制された以外の何物でもあるまい。

ホメロスの叙事詩『イリアス』にも多くの陣屋の中の女たちが描かれている。彼女らはギリシア方の戦士の世話をしているが、いずれも戦争によって敗れたため連れてこられた女たちであった。(55) アレクサンドロスの場合は芸人と身近で世話をする女とを区別して、使いわけていたようである。

前 441 年にペリクレスがサモス遠征を行った折、アッティカのヘタイラを伴ったと伝えられているし、(56) クセノフォンの『アナバシス』にもみられるように、ギリシア軍の連れてきた娼婦や踊り子は遠征軍の中にもいた。(57) アレクサンドロスの軍中にも勿論軽業師や踊り子、琴弾き女などが記述されている。(58) こうした娯楽的要素は、戦争にあけくれる兵士にとって何よりの息ぬきであり楽しみでもあったであろう。兵士にしてみれば、祖国にいる妻子はさておき、アジア人の妻やその間にもうけた子とは別に、芸人による慰めは何物にも代えがたいものであったと思われる。

そうでなければ、古典期の遠征からずっとヘタイラを同行し続けることは費用もかかることであるから不合理であろう。いづれにしても戦略にたけたアレクサンドロスであればこそ、このような兵士への配慮も怠りなかったのである。さらにアレクサンドロス自身は妾として多くの女をはべらせていたことを、ク

ルティウス・ルフスは伝えている。(59) ディオドロスもまた、前 330 年のペルセポリス攻略の折、マケドニア人たちが略奪の限りを尽し、ペルシアの女たちは装身具もろとも暴力的に奪われたと指摘していることから、捕虜となったペルシアの女たちも軍中にいたと推測される。(60)

4、後継者戦争にみられる女たち

前323年にアレクサンドロスはバビロンで亡くなった。(61) そのため後継者をめぐっての覇権争いがおき、多くの女たちもまきこまれていった。

フィリッポス II 世の娘キュンナは、アレクサンドロスの異母妹にあたる。母はアウダタといい母から戦術も習い、アミュンタスⅣ世と結婚して一子エウリュディケ（アデア）をもうけた。そして母から伝えられた戦術を娘にも伝えたのである。ポリュアイノスによれば夫亡き後、アレクサンドロス死後の争いでは次のように伝えている。(62)

> 「アレクサンドロス大王がバビュロンで死去し、後継者たちが互いに覇権を争い戦ったとき、彼女はストリュモン川の渡河を強行した。アンティパテルが阻止にでたが、彼女は彼の手の者たちを蹴散らして川を渡り、さらに行く手を阻む者たちを打ち破りながら行軍を続け、マケドニア軍との合戦を願う一心からヘレスポントスを渡ったのである。
>
> アルケタスは軍隊を率いてキュンナを迎え撃とうとしたが、マケドニア兵たちは、ピリッポスの娘で、アレクサンドロス大王の姉妹であるキュンナの姿を認めると、己れの行動を恥じ、戦意を萎えさせる有様であった。キュンナはアルケタスの忘恩を詰り、彼の率いる兵士の数にも、またその装備にも臆することなく、敢然と彼に刃を向けた。彼女は、ピリッポスの一族が彼の支配の座から追われたのを目にするよりは、死を選ぼうとしたのだ。」（戸部順一訳）

これほど明確に女が戦争と対峙した記述はない。軍事訓練、実戦と男まさりの兵を率いて戦う姿は、これまでの女たちとは全く異なっている。最終的にはペルディッカスの命令に従ったアルケタスの手により、キュンナは殺害されたのであった。これまでは戦場に同行したのはヘタイラ（奴隷身分の女）と相場

が決まっていたが、自らの意志でしかも女指揮官としてキュンナが記述されているのは、異彩を放っている。

軍人王妃として教育を受けたキュンナであればこそ、兵を率いて劣勢にもめげず戦ったのである。森谷公俊氏が述べるように、「前 4 世紀後半はマケドニア史上例をみない動乱の時代であり、だからこそ王族女性たちは平時には思いもよらぬ才能を開花させることができたのだ。それはマケドニアの女性が初めて自立して生きることのできた時代と言うべきではないか」という指摘の通りである。(63)

Pasi Loman は D. Schaps がギリシアの女は国外での戦争にはいかなかったと述べていることについて批判を加え、アレクサンドロスの異母妹キュンナを例としてあげ反論している。(64) 王族女性という特殊な立場にあるとはいえ、軍を率いたキュンナを無視することは出来ないのである。

王族女性の悲劇は、アレクサンドロスの母オリュンピアスもカサンドロスに殺され、アレクサンドロスの妻ロクサネは息子のアレクサンドロス IV 世ともども殺害されるといった具合に続いた。そしてアレクサンドロスの遺子が殺されたことによって、完全に王統が絶えたのであった。後継者戦争はこのように、王族女性たちの運命を左右し、さし迫った状況では兵を率いて遠征する女まで現われたのである。

妻子を伴って遠征する場合と、ヘタイラを伴っていく場合とでは、どのような違いが生じるのであろうか。興味深いポリュアイノスの記述があるので、みてみよう。

> 「アンティゴノスはガビエネでエウメネス軍と戦っていた。戦場は乾いた土が薄く積もっている砂地で、そこへ軍勢が押し寄せると、あたりは土煙に覆われ、敵味方の区別もつかなくなった。激戦の最中に、アンティゴノスはエウメネスの輜重隊を発見した。隊には兵隊たちの妻や子供、それに第二夫人と奴隷たちがおり、荷車には、アレクサンドロスとともに戦った際に獲得した、黄金や銀などの戦利品が積まれていた。（中略）大勝利を喜びながらエウメネス軍の兵隊たちは戦場をあとにした。ところが輜重隊が襲われ、家族が連れ去られたのに気づくと、いまのいままで勝利に酔っていた兵隊たちは、今度は悲痛の叫びをあげたのである。妻子を気遣うあま

り、多くの兵隊がアンティゴノスに使いを立て、彼に味方する決意があるのを伝えた。一方アンティゴノスは、奪った荷をいっさいの取引をせずに返すことを彼らに通告した。というのも愛着のある品物を持ち去られたことで、エウメネスの兵隊たちがたいそう落胆しているのを知ったからだ。これを聞いた兵隊たちは、マケドニア人ばかりか、ペウケステスの指揮する一万のペルシア兵までもが、ただちにアンティゴノスに寝返った。」（戸部順一訳）(65)

エウメネス（前 360 頃-316）はアレクサンドロスのかつての武将で、マケドニアの武人中の武人と言われた人物である。それに対して、アンティゴノス I 世（前 382 頃-301）も、アレクサンドロスの東征に加わり、イプソスの戦いで敗北して、世を去った者である。両者の戦いはアンティゴノス軍の戦死者が多いにもかかわらず、エウメネス軍の輜重隊が襲われ家族が連れ去られたことに気がついたエウメネスの兵たちは、アンティゴノス軍へと寝返ったのである。

かくしてエウメネスは捕えられ、アンティゴノスの勝利に終わった激戦の陰に、エウメネス軍の兵たちの寝返りがあったのである。この記述が真実を伝えているならば、妻子の身に異変が生じた場合には、簡単に敵側に組する兵士の心情をよく描写している。兵士の士気を高めるという目的で述べるならば、指揮官の立場からすれば奴隷身分のヘタイラを同行した方が、はるかに安心して戦いに集中できるのではないだろうか。

いずれにしてもヘレニズム期の後継者戦争では、妻子を伴った戦いがくり広げられたのである。

5、結び

ホメロスの『イリアス』で多くみられた女奴隷たちの機能は、古典期での遠征でもヘタイラを同行したように、兵士たちにとって不可欠な存在であった。アレクサンドロスの遠征軍にも、多くの女たちがいたのである。前古典期や、古典期と違う点は、奴隷身分の女だけではなく、自由身分の女も数多くいたことである。

ペルシア側の女たちは、クルティウス・ルフスによれば祖国の慣習に従って王族女性を同行し、さらに妾とされる奴隷身分の女たちも大勢軍に同行させて

いた。捕虜となったダレイオス王の母シシガンビスから女官や妾まで様々な立場の女たちがいたのである。

一方アレクサンドロス側の軍中には、上記のペルシアの女はみな捕虜となり、マケドニア兵士の妻となったアジア人女性やその子供がおり、その他ギリシアからも芸人が呼ばれていた。女捕虜のうちマケドニア兵の妻となった者もいたであろうが、その他にも王には妾たちが多くいたのである。妾たちは王の食事の支度や寝室での添寝、さらに狩猟のときに歌を歌い祈りを捧げたという。

ヘレニズム期の遠征では、兵士は祖国にいる妻とは別に現地妻を娶り、子どもまでももうけていた。それはまさしくアレクサンドロスの同化政策の手段として行われたものであった。東西融合の結晶として、新たな生命も遠征の産物として誕生していたのである。後継者戦争では、アレクサンドロスの異母妹キュンナが、兵を率いて戦ったとポリュアイノスは記述している。軍事訓練を母から習い娘に伝えたキュンナは、まさに「男の仕事」を行ったと言えよう。

古典期に記述されている防戦に加わった女たちは、あくまで自分の家を守るために行ったのであり、キュンナのように遠征に出かけた訳ではない。自らの意志で敵と相対峙する女は、キュンナが初めてである。女が戦った意義とは何かを問うと共にマケドニア王族女性が誇りをもって自らの運命を決定したことも、正しく評価したい。

さらにヘタイラを同行した遠征とは異なり、妻子を同行した場合は、妻子の身に異変が生じた時には、兵たちはいとも簡単に敵側へ寝返ったとする記述から、妻子を同行した際の指揮官のリスクも指摘されよう。ヘタイラを同行した場合には、兵士の寝返りはヘタイラが原因ではありえなかったからである。

ヘレニズム期においては、奴隷身分や自由身分の区別なく、女たちも遠征戦に同行していた。前古典期では女の本性を禍いと考え、古典期では弱くて臆病とされたが、アリストテレスは女の放縦さを強調した。しかしヘレニズム期に至ると、B.S.Ridgeway が指摘するように、都市や宗教の領域においても女性の参加が目立つようになった。(66) こうした傾向はマケドニア王族女性キュンナに代表されるように、戦いにおいても前戦で兵を指揮し、自らも戦術を学びその成果を娘にも伝えたことでも裏づけられるのである。

「戦争は男の仕事」と認識してきた古代ギリシアの男たちは、ヘレニズム期に至って彼らの認識の及ばない現実に遭遇することになったのである。ヘレニ

ズム期の王族女性の戦争への参加は、特殊な立場を表すとともに、ポリスの枠を越えた時代であったからこそ、現実のものとなったと言えるのではないだろうか。

注

(1) *Il.*,VI, 492-3; Aristophanes, *Lys*., 520.

(2) Thuc., II, 4, 1-2; III, 74, 1-2.

(3) David Schaps, The Women of Greece in Wartime, *CPh*.,77, 1982, 193-213.

(4) F. Graf, Women, War, And Warlike Divinities, *ZPE*, 55, 1984, 245-54.

(5) William D. Barry, Roof Tiles and Urban Violence in the Ancient World, *GRBS*, 37, 1996, 55-74.

(6) Pasi Loman, No Woman No War: Women's Participation in Ancient Greek Warfare,*G&R*, 51, 2004, 34－54.

(7) 拙著、『古代ギリシアにおける女と戦争』、近代文芸社、1998。

(8) 桜井万里子著、『古代ギリシアの女たち』、中公新書、1992、８頁。

(9) Dem, 59, 122. Pierre Brulé, *Women of Ancient Greece*, Tr,by, Antonia Nevill, Edinburgh, 2003, 187.

(10) Catherine Johns, *Sex or Symbol? Erotic Images of Greece and Rome*, British Museum Press, 1982, 114-120.

(11) Athenaeus, *Deipnosophistai*, XIII, 572f. Diod., XII, 27, 2; XII, 28, ３.

(12) Xen., *Oec*., VII, 35-7.

(13) Meiggs and Lewis, *A selection of Greek Historical Inscriptions*, Oxford, 1969, No.23.

(14) S. B. Pomeroy, *Goddesses, Whores, Wives and Slaves, Women in Classical Antiquity*, London, 1975, 30-1; 48-9.

(15) 西村賀子、「ギリシア神話と「女性嫌悪」－パンドラ神話をめぐって」、『ユリイカ』２、青土社、1997、81－７頁。

(16) Hes., *Th*., 585. ヘシオドス、『神統記』、廣川洋一訳、岩波文庫、1984 年, 75 頁。F.I. Zeitlin, Signifying difference: the myth of Pandora, *Woman in Antiquity, new assessments*, ed, by Richard Hawley & Barbara Levick, London, 1995, 59.

(17) Hes., *Erga*, 235, 336-350. ヘシオドス、『仕事と日』、松平千秋訳、岩波文庫、1986 年、39、51-53、55、91-2 頁。

(18) 吉田敦彦著、『ギリシア人の性と幻想』青土社、1997、22 頁。

(19) Semonides, *Fr.7*.ed, Diehls Kranz, *Fragmente Der Vorsokradiker*, Weidmann, 1974.

(20) Aesch, *Th.*, 187-95. 『ギリシア悲劇全集』２、アイスキュロス『テーバイを攻める七人の将軍』、池田黎太郎訳、1991、岩波書店、155 頁。

(21) Sophoc., *Fr.189*. 『ギリシア悲劇全集』11. ソポクレース断片集、岩波書店、1991、69

頁。断片エピゴノイ、189. 木曽明子訳。

(22) Eurip., *Fr.808*. 『ギリシア悲劇全集』12、エウリーピデース断片集、岩波書店、1993、412 頁。断片ポイニクス 808、根本英世訳。

(23) Thuc., III, 74, 1-2.

(24) Xen., *op. cit*., VII, 22-3.

(25) Plat., *Rep*. 455, D-E. プラトン『国家』（上）藤沢令夫訳、岩波文庫、1979、355 頁。

(26) ヒポクラテス、『ヒポクラテス全集』第 2 巻、翻訳・編集責任、大槻真一郎、「処女の病について」藤原博訳、エンタプライズ株式会社、1985、813 頁。

(27) Eurip., *Fr.271a*. 『ギリシア悲劇全集』12、エウリーピデース断片集、断片アウゲー271 a、西村賀子訳、117 頁。

(28) Arist., *H.A*., 581b, 10-19. アリストテレス、『動物誌』（下）島崎三郎訳、岩波文庫、1999、18-19 頁。

(29) Arist., *Pol*., 1269b13. アリストテレス、『アリストテレス全集』15、政治学、山本光雄訳、岩波書店、1969、71-2 頁。

(30) Diod., XVI, 87, 3.

(31) Plut., *Vitae Parallelae*, Alex, 11. プルタルコス、『プルタルコス英雄伝』（中）「アレクサンドロス」井上一訳、ちくま文庫、1987、21 頁。

(32) Arr., *Alex.An*., I, 8, 8. アッリアノス著、『アレクサンドロス大王東征記』（上）大牟田章訳、岩波文庫、2001、60 頁。

(33) *Ib*., I, 9, 9.

(34) Diod., XVII, 21, 6. アッリアノス I, 16, 6 では２万人という数字はみられない。

(35) Arr., *op. cit*., I, 24, 1.

(36) *Ib*., I, 24, 2.

(37) Hdt., VII, 83, 2. Maria Brosius, *Woman in Ancient Persia, 559-331BC*, Oxford , 1996, 183-200.

(38) Q. Curtius, *Hist*., III, 8, 12. クルティウス・ルフス『アレクサンドロス大王伝』、谷栄一郎・上村健二訳、京都大学学術出版会、2003、35 頁。

(39) *Ib*., III, 12, 25. 『拙著』1998. 150-5 頁。

(40) Arr., *op. cit*., III, 19, 2.

(41) *Ib*., II, 14, 1-2; II, 25, 1.

(42) Q. Curtius, *op. cit*., IV, 1, 13.

(43) *Ib*., IV, 10, 18-９.

(44) *Ib*., IV, 10, 29-33.

(45) Plut.,*op. cit*., Alex, 30.

(46) Q. Curtius, *op. cit*., III, 12, 11.

(47) *Ib*., III, 3, 22-５.

(48) Arr., *op. cit*., VI, 25, 5. アッリアノス、『前掲書』141-2 頁。

(49) ピエール・ブリアンによれば、子供の数を 1 万人近いと述べている。ピエール・ブリ

アン著『アレクサンダー大王』、桜井万里子監修、福田素子訳、創元社、1991、41 頁。Arr., *op. cit*., VII, 12, 2. ピエール・ブリアン著『アレクサンドロス大王』、田村孝訳、白水社、2003、123-4 頁。

(50) Arr., *op. cit*., IV, 19, 4-5. Simon Price, The History of The Hellenistic Period, *The Oxford Illustrated History of Greece and The Hellenistic World*, Ed, J. Boardman, J. Griffin, O. Murray, Oxford, 1986, 311.

(51) Arr., *op. cit*., VII, 4, 8. Plut., *op. cit*., Alex, 70.

(52) Diod., XIX, 11, 6-7.

(53) Aelianus, *V.H*., XIII, 36. アイリアノス著、『ギリシア奇談集』、松平千秋・中務哲郎訳、岩波文庫、1989、392-3 頁。

(54) Plut, *op. cit*., Alex, 72.

(55) 『拙著』、1998、138-55 頁。

(56) Athenaeus, *op. cit*., XIII, 572 f. アテナイオス、『食卓の賢人たち』5、柳沼重剛訳、京都大学学術出版会、2004、61 頁。

(57) Xen., *An*., IV, 3, 19; V, 4, 33; VI, 1, 12-3.

(58) Plut., *op. cit*., Alex, 67.

(59) Q. Curtius, *op. cit*., VIII, 9, 28-30.

(60) Diod., XVII, 70, 1-71, 73.

(61) Q. Curtius, *op. cit*., X, 5, 6.

(62) Polyaen., *Strate*., VIII, 60. ポリュアイノス、『戦術書』、戸部順一訳、国文社、1999、434 頁。

(63) 森谷公俊著、『王妃オリュンピアス』ちくま新書、1998、214 頁。

(64) Pari Loman, *op. cit*., 45.

(65) Polyaen, *op. cit*., IV, 6, 13. ポリュアイノス、『前掲書』、戸部順一訳、198-9 頁。

(66) B. S. Ridgeway, Ancient Greek Women and Art, *AJA*, 91, 1987, 409.